

隠された湯殿山信仰と御沢仏にみる復興

岡田 靖

山形県を中心にそびえる出羽三山は、古来より西の熊野と並ぶ修験の聖地として崇拜の対象とされてきた。江戸時代に最盛期を迎え、東北地方のみならず東日本全域からの多くの参詣者が出羽三山へと続く街道を行き交った。出羽三山への登り口とされる八方七口には、神仏混淆の密教系の寺院がそれぞれ拠点を構え、壮大な伽藍を誇った。しかし、近代の幕開けとともにおきた神仏分離が、その繁栄に大きな影を落とすことになる。全国で吹き荒れた廃仏毀釈は、幾多の仏教所産を消滅させた。だが、神仏分離令は人々の心までは分離させることができなかったのである。

出羽三山の奥の院である湯殿山の信仰を中心に、江戸時代以前の栄華と神仏分離による混乱、そしてその混乱にもめげずに隠し、守り通した仏教文化や、その信仰の復興の様子を、残された文化遺産を通じて見ていきたい。

出羽三山信仰

出羽三山は、月山・羽黒山・湯殿山の三山を対象とする山岳信仰であるが、湯殿山の代わりに葉山もしくは鳥海山を加えて三山としていた時代もあった。神仏混淆の修験道が展開された出羽三山は、中世頃までは天台宗(本山派)と真言宗(当山派)の二大勢力を中心に仏教諸宗派が混在した状態であったが、慶長十八年(1613)に出された修験道法度によって修験道が天台宗と真言宗のいずれかの所属を強要されることに伴い、羽黒山を拠点とする天台宗系と湯殿山を拠点とする真言宗系の二派に明確に分離した。

とする真言宗系の二派に明確に分離した。江戸前期には、両派が出羽三山の主権を主張対立して幕府に二度にわたる訴訟を起こす(両造法論)など、出羽三山と一括りにすることが困難なほどの複雑な様相を呈していた。三山のひとつである羽黒山は、江戸時代までは羽黒山出羽神社と別当寺として寂光院を配し、主殿神を伊氏波神、本地仏に聖観音菩薩を祀っていた。羽黒山一山の寺院は、中世までは真言宗や天台宗を含む八宗兼学の状況であったが、寛永十六年(1639)以降、一山は東叡山寛永寺に属して天台宗に統一され、月山山頂に位置する月山神社(主祭神は月読命、本地仏は阿弥陀如来)とその別当寺である岩根沢の日月寺や肘折の阿吽院を支配した。天台宗に統一された羽黒山は、江戸時代初期に幕府の重鎮であった天海の弟子の天有の活躍によって隆盛を極め、山中には寺院や宿坊が立ち並び、一方の湯殿山は、出羽三山の奥の院として位置付けられ、神秘的な湯が噴き出す巨岩をこ神体とする聖地である。湯殿山は江戸時代以降に真言宗に統一され、大山祇神、大己貴命、少彦名命の三神と本地仏として大日如来を祀っている。別当寺としては、現在の鶴岡市側に即身仏で有名な大日坊と注連寺を表別当とし、西川町側には本道寺と大日寺を裏別当と称した合計四箇寺を配し、いずれも出羽三山への登拝口である八方七口に数えられて多くの参詣者を束ねた。別当寺の一つである西川町大井沢の金色山大日寺は、天長年間(824-834)に空海によって開山されたと伝わる。室町時代には中興の祖と称される道智上人によって置賜地方からの参詣路(道智道)が開かれ、その後、延宝二年(1674)におきた火災によって伽藍を全焼するも、亮海、利海、亮快の三僧によってただちに復興され、「湯殿まで傘の波うつ大井沢」と歌われるほど、全国からの白装束をまとった多くの参詣者で賑わった。

神仏分離と湯殿山

明治元年に神仏分離令が発せられると、神仏習合の修験道であった出羽三山もまた、神仏の分離を強要されることになった。羽黒山は出羽神社への組み換えを余儀なくされ、明治六年に国家神道の急進派であった西川須賀雄が出羽神社の官司として着任すると、徹底した廃仏毀釈が強行され、多くの寺院や仏教系の什物が破壊や散逸の憂き目をみた。一方の湯殿山においても大きな混乱が生じた。鶴岡市側の大日坊と注連寺は、湯殿山は古来より仏山であるとの主張を固持し続けたが、西川町側に所在する大日寺と本道寺の二箇寺は、寺号を廃して湯殿山神社となった。さらに、本道寺は戊辰戦争による戦禍によって伽藍の大半を消失した。その後、湯殿山神社として明治二十二年に本殿や拝殿などの再建が図られたが、以前の東北一の規模の伽藍に及ぶほどの再建は叶わなかった。本道寺とともに湯殿山神社となった大井沢の大日寺もまた、明治三十六年に起きた火災によって、仁王門、鐘楼、山王堂を残してほぼ全山を消失した。その後、大井沢では小規模な再建が図られるにとどまり、室町時代以降に隆盛を極めた面影は、残された建物や礎石が伝えるのみである。

江戸時代には全国から年間一万人を超える参詣者を集めるほどに繁栄を誇った両寺は、神仏分離令に伴う廃仏毀釈によって多くの仏教系の什物を散逸し、さらに火災によって継承されていた文化遺産を失ったのである。

明治政府の政策として発せられた神仏分離令による混乱は、出羽三山に計り知れない影響を与えた。しかし、長年に渡って続けられてきた信仰は、簡単に宗旨替えできるものではない。人々は、新政府からの突如の指示に戸惑いながら、受け継いできた信仰を必死で守ろうとしたのである。神仏分離に伴って起きた廃仏毀釈の潮流を背景に、一部の急進的な変革者らによって多くの仏教系の所産が失われた。しかしその陰で、その情勢を憂いた人々の手によって、匿われたり、隠されたり、または関係寺院に譲り渡すことでその命運を保たれた仏像が、当時の人々の想いを伝えてくれる。

隠された湯殿山信仰

日本道寺では、明治元年の戊辰戦争の際に新政府軍によって伽藍が焼き払われたが、焼け残った仏像も神仏分離令の発令によって他寺院に譲渡された。神仏分離によって譲渡された旧本道寺の仏教系什物は、湯殿山から分離して真言宗寺院を保った大日坊や注連寺の二箇寺をはじめ、関係があった諸寺院に引き取られて今も現存している。その時に譲渡された仏像のうち、銅造弘法大師坐像と木造金剛力士像が近年になって返還され、帰還後に西川町有形文化財に指定されて、現在、口ノ宮湯殿山神社拝殿内に安置されている。

復帰を遂げた銅造弘法大師坐像は、規模、造形性ともに優れ、江戸時代の本道寺の繁栄ぶりを伝える貴重な遺産である。また、像背面に記された銘により、本像が六十六部廻国に関する像であることが知られる。台座背面に記された銘文には、発願者、制作年、制作者などの記載とともに、廻国の人々となった人々の名前が記され、信仰者が安芸、紀伊、尾張、江戸などの広域に広がっていたことがわかる貴重な事例でもある。

一方の木造金剛力士像(仁王像)は、江戸時代までは本道寺山門に安置されていた。この仁王像は、江戸時代に造像された他の仁王像の中でも特異な造形を示し、三対近い像高に独特の迫力を放つ極めて秀逸な作である。平成十七年に仙台



「銅造弘法大師坐像」寛政2年(1790) 口ノ宮湯殿山神社【日本道寺】(西川町)



「木造金剛力士立像」とX線透過写真 16-17世紀 口ノ宮湯殿山神社【日本道寺】(西川町)

ホテルから帰還した仁王像は、造形様式や構造的な特徴から十六世紀〜十七世紀頃の造像であると推測され、制作者は中央の仏師であろうと推察されている。また本センターでは、仁王像の木寄せ目に生じた隙間からファイバースコープを差し込んで内部の観察調査を実践し、像内に無数の願文と思われる紙資料が納められていることを確認した。それらから、本道寺時代の篤い信仰の様子が窺えたのである。

帰還した両像とは別に、西川町入間にある江戸時代以前に本道寺の末寺であった真言宗智山派の愛染院には、神仏分離の際に当時の住職であった大泉小三郎が本道寺から譲り受けた木造阿彌陀如来坐像が安置されている。阿彌陀如来坐像は、全体的に精緻な彫刻が施され、表面塗膜には壮麗な装飾が施されている。この像の造形、技法構造的な特徴から、江戸時代初期頃の中央仏師による造像であると推定されるが、腹部に内衣を紐で結ぶ表現がみられる特徴には、黄檗宗様式の影響がみられる。

一方の大日寺は、神仏分離の影響とともに、明治三十六年の火災によって伽藍のほとんどを失った。わずかに火災を免れた仁王門や門前に移された地藏堂と七条仏師大貳作の地藏菩薩坐像が、大井沢の江戸時代以前の繁栄ぶりを今に伝えている。しかし、神仏分離の際に散逸された仏像が、今も山形県内に複数体残されている。大日寺の本尊は米沢の小野川温泉にある宝珠寺に、不動明王三尊像は飯豊町の常福院に譲渡されたと伝わる。

常福院に譲られた木造不動明王三尊像は、中尊の不動明王像の像高が百八十センチ近くもある巨像で、写実的な表現と華麗な装飾に彩られた堂々たる表現は、見る者を圧倒させる迫力を放っている。大日寺の御上火場に祀られていたと伝えられる本像は、全身に帯びた長年の護摩焚きによる煤が当時の信仰の様子を伝えている。

神仏分離の折、伽藍を守る仁王像もまた廃仏毀釈の影響を受けた。仁王門が明治後期の火災で焼け残るも、仁王像が不在のまま旧大日寺址にたたずんでいる。では仁王像はどこ

に行つたのだろうか。大井沢では、大日寺の仁王像は現在の寒河江市常林寺に譲り受けられたと語られている。だが、常林寺のある寒河江では、仁王像は常林寺に程近い寒河江八幡宮から譲られたものだと言えられており、その見解に食い違いがみられた。そんな中、本センターにて常林寺仁王像の修復処置の依頼を頂いた。そして、その修復過程において新たに興味深い発見が得られたのである。

現在、寒河江市の常林寺に安置される仁王像は、首柄に記された墨書銘から明和三年（1766）に山形横町の後藤新吉によって造像されたことが判明している、地方仏師の独特の造形感や技法構造が特徴的な尊像である。しかし、それ以外の造像の縁起を示す情報は今まで確認されていなかった。仁王像は、現状で常林寺の仁王門の内部空間いっぱいに取り、足裏を直に仁王門の床板につけて立っている。しかし、修復に際する仁王像の搬出の際、構造把握のためにX線調査を敢行したところ、足先の内部に足柄の痕跡が確認されたのである。これにより、仁王像が元々は足柄によって岩座に立脚していたことが判明した。しかし、足柄の大きさから想定される岩座の想定寸法を加えると、現状の仁王門では天井に頭がつかえてしまう。そのことから、この仁王像は制作当初から大きく改変が加えられていたことが分かり、仁王門もまた制作当時の門ではないことが判明した。そうすると、大井沢に残されている仁王門の寸法が気になってくる。そこで早速実測調査を敢行し、大井沢旧大日寺の仁王門の実測寸法に、想定される岩座寸法を加えた仁王像をあてはめてみると、仁王像が見事に収まったのである。

さらに仁王像の修復処置を進めるうちに、仁王像の像内から多くの納入品が発見された。それらの護摩木や護摩札などの納入品の中から、「湯殿山権現」と記された加護札が確認された。この「湯殿山権現」の加護札の存在から、仁王像が湯殿山信仰の関係寺院から譲られた可能性がさらに高まったのである。

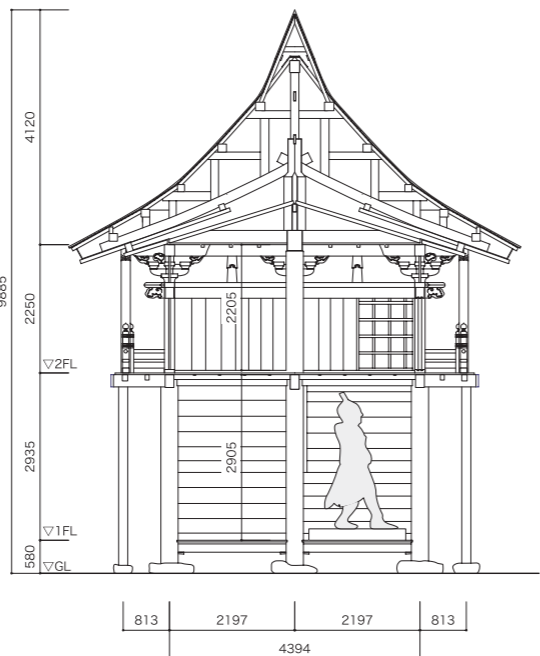
これらの仁王像からの新たな発見を踏まえ、寒河江の伊勢商人中村七兵衛にまつわる資料に着目してみたい。中村家は

代々七兵衛を世襲するが、五代目の中村七兵衛の時、隣軒の安孫子孫兵衛家から出て大日寺の典座となった安孫子幸之進に金千両を貸していたことが、同家に残されている文書資料によって判明している。また五代目七兵衛は、神仏分離に際して一家神道に移り、神職名として千原姓を名乗ったとあり、寒河江八幡宮と深いかわりを持つことも知られている。それらの文書資料に仁王像に関する記載はないものの、大日寺と寒河江八幡宮を繋ぐ五代目中村七兵衛（千原弥左衛門）が、神仏分離の混乱期の大日寺仁王像に深く関係していた可能性は高いと考えられる。

このような修復を通じて発見された情報や文献資料から判る状況証拠から、この常林寺仁王像が、神仏分離の際に大日寺から中村家を通じて寒河江八幡宮にもたらされ、そして八幡宮を経由して現在の常林寺に譲り受けられた経緯が推察できる。そしてその経緯にもまた、衰退していく大日寺の状況を憂いた人々の想いが垣間見えるのである。

神仏分離により混乱した寺院では、仏像を譲り受けた証拠を文献などに記すことは少なく、未だに謎が多く残っている。しかし、残された仏像を丹念に調べていくことで、その裏側に当時の様相が垣間見え、そこには混乱の中でも仏教を尊び、守り伝えてきた多くの人々の想いを感じることができるのである。そして、その人々の想いは、神仏分離によって衰退した信仰の復興へと繋がっていく。

神仏分離の混乱が落ち着いた明治十年頃、湯殿山の別当寺で修業をした修験者らが、地域の人々とともに各地で信仰の復興的な活動を開始する。その出羽三山の周辺地域で起きた動きを、白鷹町の塩田行屋と新潟県村上市の円福寺の事例を通して見ていきたい。



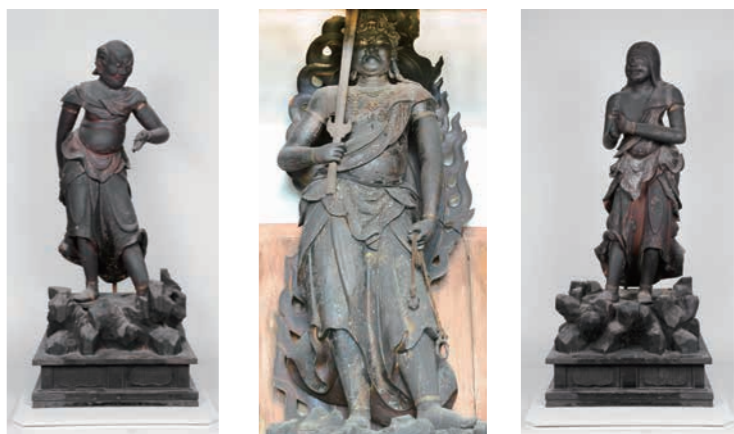
旧大日寺仁王門 実測図面



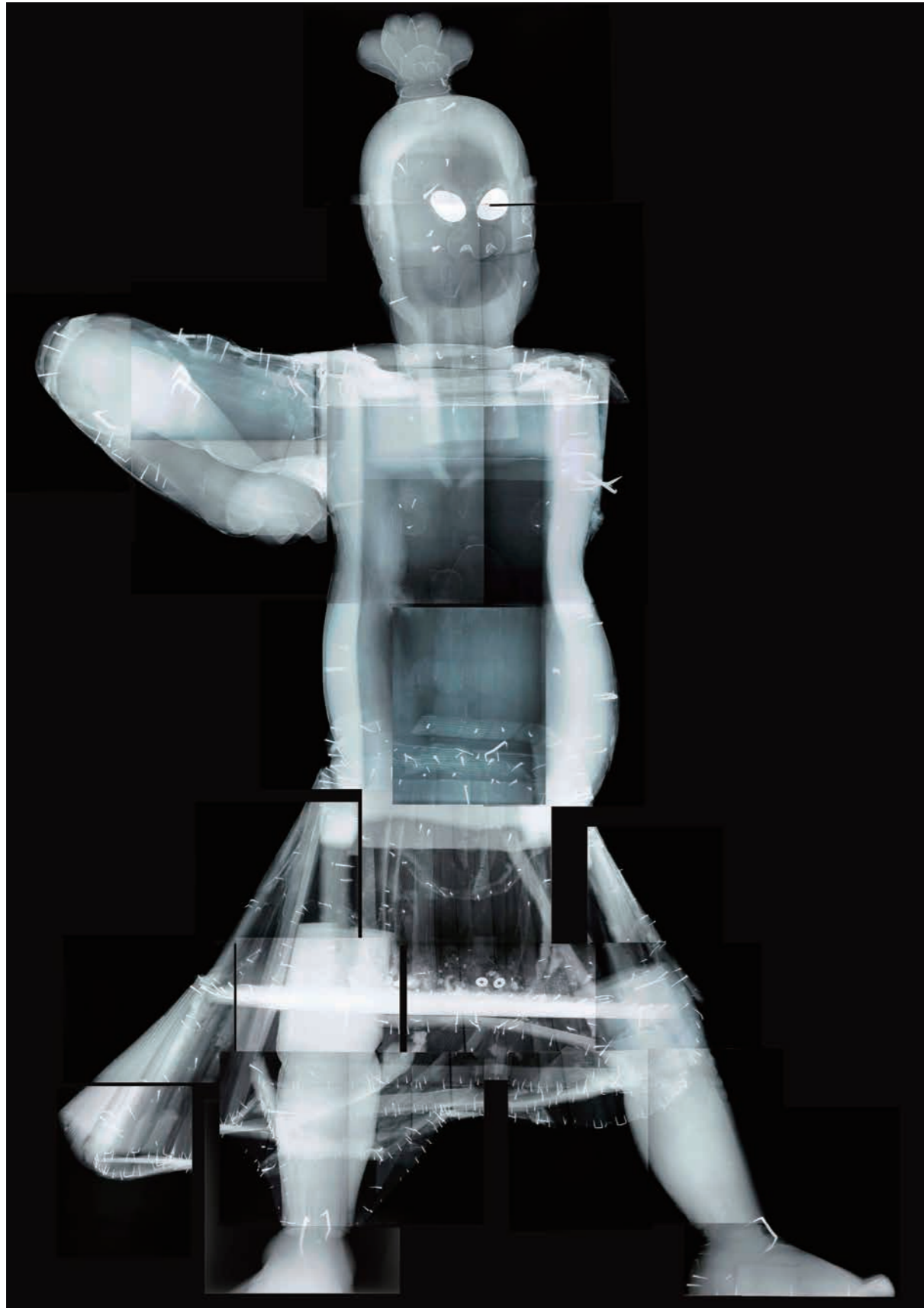
「旧大日寺仁王門」江戸時代 旧大日寺【湯殿山神社】(西川町)



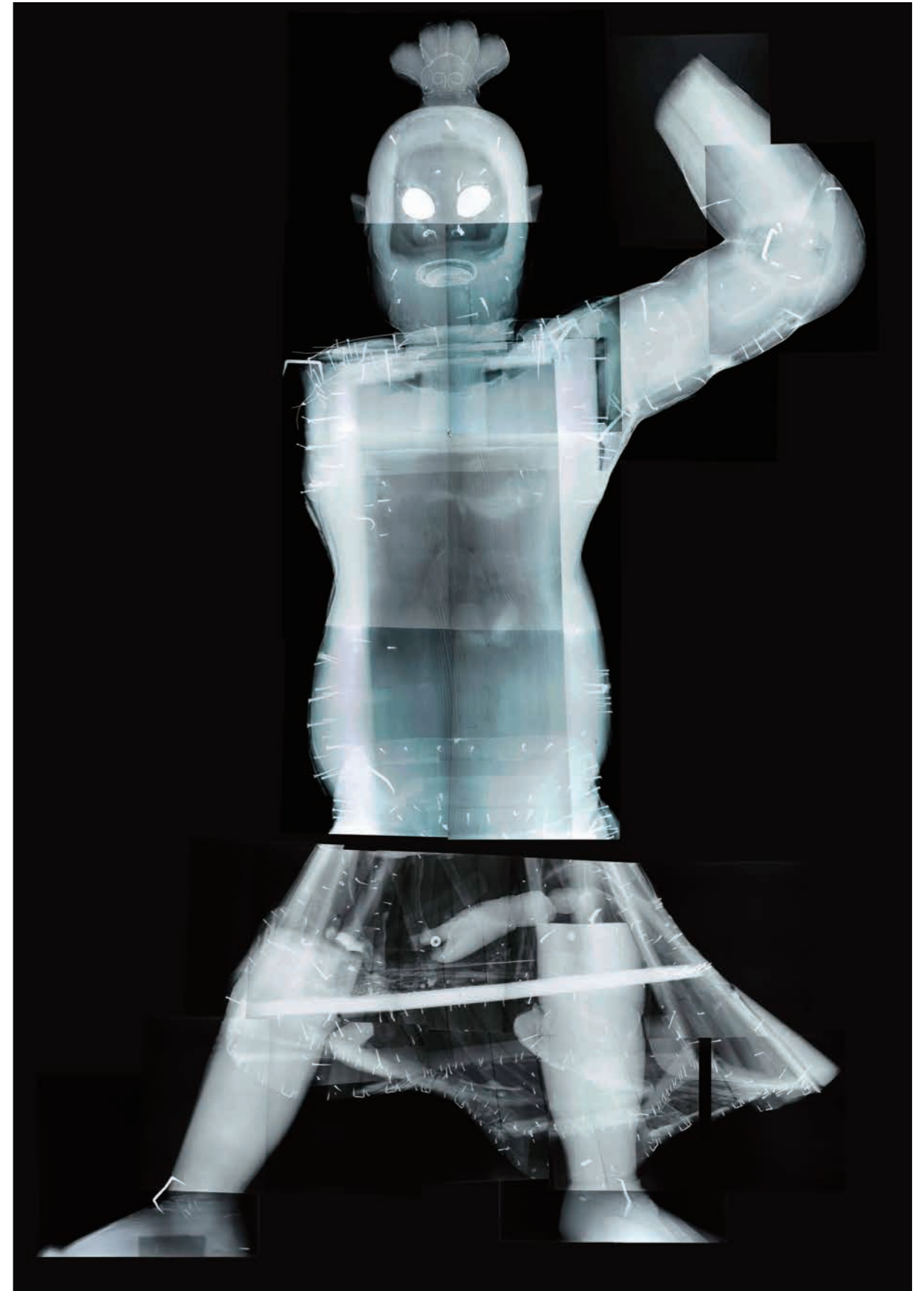
「仁王像」後藤新吉 明和3年(1766) 常林寺(寒河江市)



「木造不動明王三尊像」室町時代後期～江戸時代初期 常福院(飯豊町)



常林寺仁王像（呼形像）X線透過写真



常林寺仁王像（阿形像）X線透過写真

塩田行屋と円福寺の御沢仏と 湯殿山信仰の復興

山形県白鷹町十王にある塩田行屋は、湯殿山修験者の明寿海によって明治十年頃に建立された。現在遺されている建造物は本堂と土蔵（大師堂）のみになっているが、以前にはこの他に大日堂と修験者の庫裏があった。

本堂には、二十五体の諸像が階段状の須弥壇に安置されている。この諸像には一揃いの方座が設えてあるために一具であるとかわり、方座正面には寄進者の住所と氏名、仏像の尊名が記されている。ここに表されている尊名には「波分不動明王」、「飯ノ山白衣明王」、「護身仏」、「大聖仙人」などのように、通常の仏像の尊名には見られないものが多く含まれている。これらの諸像は、明治期の作であることやあまりにも特殊な尊名であることから、今までほとんど研究の対象とされてこなかった。しかし、調べを進めるうちに、本堂の諸像が「御沢仏」といわれる仏像群であることが明らかとなった。

御沢仏とは、湯殿山詣の「御沢駈け」というものに関係する。御沢駈けとは、湯殿山の仙人沢を沢登りして奥の院のご神体へ参詣する修行であり、その行程にある特徴的な山、岩、洞窟、滝などに神仏を見立て、それらを御沢仏と称している。塩田行屋本堂に祀られている仏像群は、その御沢仏を彫刻化したものである。

御沢仏像は、数は少なくなつてはいるものの、かつて湯殿山別当寺であった大日坊にも安置されている。また同じく別当寺であった注連寺にも、版木に御沢仏の尊名を記した曼荼羅状のものが遺されている。伝えによれば、御沢仏は湯殿山系寺院で最も重視されるものであるという。

塩田行屋の御沢仏像は、山形の仏師新海宗慶とその息子の新海竹太郎によって、明治十二年頃に造像されたことが本センターの調査によって判明した。また、御沢仏像の寄進者が塩田行屋周辺の住民であったことも確認された。御沢仏像が造像された理由としては、御沢仏が湯殿山の根本であることから推察すると、参拝者が塩田行屋の御沢仏像を参拝する

ことで、湯殿山自体に参拝せずとも、同様の功德が得られるものとして造像されたと推測される。そのような信仰形態は、土蔵に安置されている厨子入りの四国八十八箇所本尊仏像の存在にも見られる。これらは、参拝しなくても病や加齢、日常生活などの理由によってそれが叶わない里の人々の需要に基づいたものであると思われる。明治時代の十年頃、多くの地元住民の寄進を受け、大日坊を出た修験者によって建立された塩田行屋は、新時代の到来によって混乱した人々の願いの救済のために建てられたのであろう。

また塩田行屋には、御沢仏の尊像以外にも、明治時代以前に造像された由緒不明の仏像が安置されている。この木造役行者倚像、木造如来形立像、銅造蔵王権現懸仏の三体は、その来歴は不明であるものの、これらとともに大日寺什物と陰刻された華鬘が伝わっていることから、神仏分離の折に大日寺からもたらされたものとも推測されている。ここにもまた、神仏分離によって離散した湯殿山の信仰仏を受け止めた様子が垣間見え、神仏分離の混乱を乗り越えた地域住民の湯殿山への信仰が窺える。

新潟県村上市塩谷地区にある円福寺には、同じく御沢仏群像が安置されている。塩谷地区は程近くに日本海がせまり、山形県とも隣接した地理関係にある。同地区は江戸時代までは酒田から新潟、そして大阪、京都へと繋がる北前船の中継港として栄えた土地である。

円福寺は、湯殿山信仰の別当四箇寺の一つである注連寺の末寺として、注連寺の高弟であった堯海によって室町時代頃に開基されたと伝わっている。地域の湯殿山信仰の拠点であった円福寺は、第十七世住職の行實海によって明治時代に中興されたが、昭和三十年頃の善明海の代を最後に、無住の寺となつて現代に至つていない。

円福寺本堂の須弥壇の中央には本尊である銅製の大日如来坐像が祀られているが、寺伝では湯殿山仙人沢から譲り受けたものだと言われている。そして本尊の脇には、御沢仏の中でも湯殿山の二神体を表した御七五三金剛童子像と、湯殿山

の開山者である弘法大師像の二体の仏像が安置されている。

円福寺の本堂をコの字型に取り巻く外回廊には、外側に向かって築かれた壇に間仕切りをして個室空間を形成し、その個室ごとに御沢仏像が安置されている。その御沢仏の配置は、円福寺にも伝わる『湯殿山法楽』に記された御沢仏の順番に沿って並べられ、右回りに外回廊を巡ると湯殿山御沢駈けを参詣するような仕掛けとなっている。

円福寺の御沢仏群像は、間仕切りのある個室にそれぞれの尊像が納められていることも特徴的であるが、個室に設置された壇や壁には流木を利用した造作が施され、それらに緑や青、または白の彩色を施して岩や崖などの自然物を表現している点が極めて独特である。特に象徴的なのは大聖不動明王像のある個室で、それには正面の壁面に白色顔料で滝のような表現が描かれている。

これらの円福寺の御沢仏像の造像の経緯は、文献などが残っていないために定かではなく、また無住の時代を経た円福寺では御沢仏の情報について口伝としても伝わっていない。しかし、本センターによる本堂に掲げられている「湯殿山御澤本地佛安置二付講中連名」と書かれた奉納板などの調査見解から、御沢仏の造像年代は明治十一年頃であると推定された。

また円福寺には、先の多くの寄進者名が記された「湯殿山御澤本地佛安置二付講中連名」の額とともに、同時代に奉納された「護摩講中」と記された額にも多くの寄進者の名前が連なっている。他にも、寄進者三千名と記された奉納札が残されており、明治十年代に、当時の住職であった行實海によって活発な宗教活動が行われたことが知れるのである。

塩田行屋と円福寺。この遠く離れた場所で同時代に造像された御沢仏。その背景には何があつたのだろうか。

塩田行屋は、現在の管理者である渋谷家を中心に、地域住民の多くの寄進によって御沢仏像と建物が建立された。一方の円福寺では、御沢仏像とともに同時代に奉納された多くの寄進者の名を記した奉納札が伝えられている。それら多く

の寄進者の存在は、混乱期を経た当時の湯殿山信仰に対する地域住民の信仰の深さを物語り、国家の政治的理由で出された神仏分離令が、民衆の信仰心までも分離するには至らなかった証拠とも言える。

塩田行屋を開いた明寿海が修業した大日坊と、円福寺を開いた行實海が修業した注連寺は、いずれも神仏分離の際に仏教寺院であることを固持したことと引き換えに、湯殿山の祭祀権を失った寺である。その二箇寺で修業した修験者によって湯殿山信仰の中核とも言える御沢仏群像が、混乱期を経た明治十年代に造像された背景には、その造像に関係した人々の湯殿山信仰への復興的な思いが垣間見えるのである。

では、塩田行屋と円福寺に祀られていた御沢仏の元となつた湯殿山の御沢駈けとは、一体どのような行であったのだろうか。両寺の御沢仏像の放つ独特の存在感の理由を探るべく、かつて御沢駈けが行われていた湯殿山の仙人沢を訪れた。

御沢駈け行

塩田行屋や円福寺に祀られている御沢仏の根本は、湯殿山信仰の重要な修行である御沢駈け行にある。御沢駈け行は、湯殿山の仙人沢において行われ、湯殿山法楽を唱えながらご神体までを巡る行である。

湯殿山の参籠所で白装束に草鞋をはいて身支度を整えた我々は、出羽三山神社の禰宜の案内のもと、御沢橋の袂から仙人沢に降り、ご神体まで沢沿いに続く湯殿山御沢駈けの実路調査を敢行した。語ることさえ許されないご神体を中心とした湯殿山の聖域には、御沢仏に込められた神秘的な世界が広がっていた。

御沢駈けの実路調査によって、御沢仏の大聖仙人像は湯殿山の手前にある仙人岳、御蔵大黒弁財天像は岸壁から突き出た巨大な岩、胎内明王像は洞窟、白衣観音像はカルシウム質を含む水によって白色化した岸壁、そして御秘密金剛童子は湯殿山の巨石に湯が湧き出すご神体そのものであることなど



「御沢仏群像」 明治 11 年頃 円福寺本堂内 (新潟県村上市)



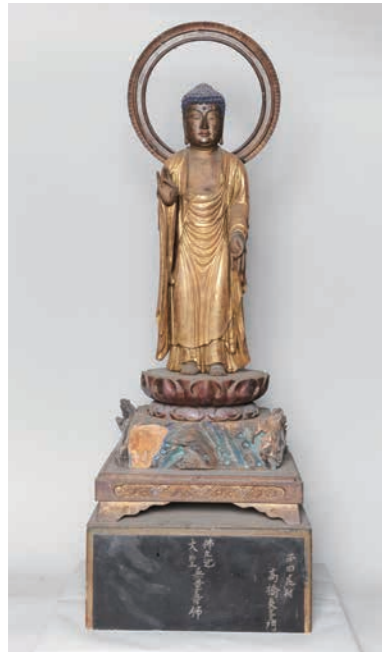
「御沢仏群像」 新海宗慶・新海竹太郎 明治 12 年頃 塩田行屋本堂内 (白鷹町)



円福寺本堂 (新潟県村上市)



塩田行屋本堂 (山形県白鷹町)



「仏生池大聖無量寿佛像」



「三宝荒神像」



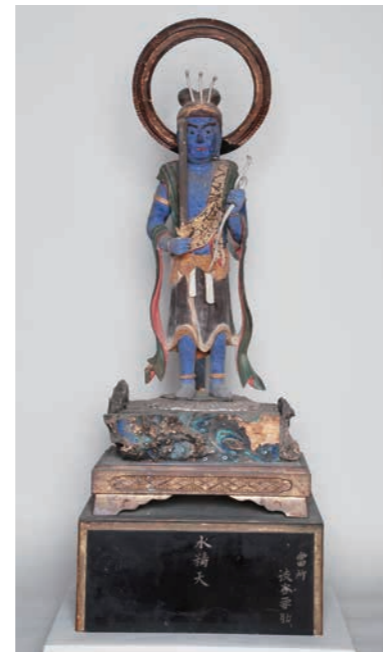
「御前護身佛像」



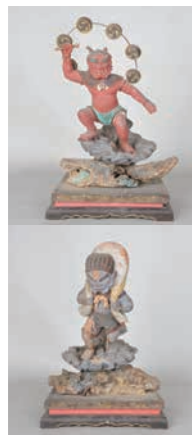
「御流釈迦文殊普賢菩薩像」



「御秘密八大金剛童子像」



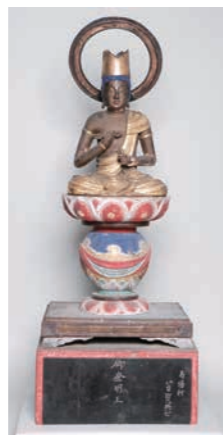
「水精天像」



「風神像」「雷神像」



「御山開山弘法大師像」



「御釜明王像」



「御峯十万八千佛像」



「八萬燈明佛像」



御沢駈けの实景



「大聖仙人像」



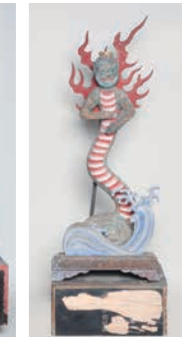
御沢駈けの实景



「剣ノ明王像」



「護身佛像」



「波分不動明王像」



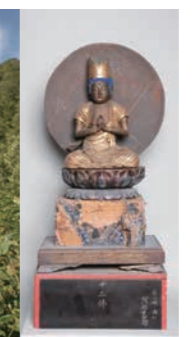
御沢駈けの实景



「梵天帝釈両部大日大靈佛像」



御沢駈けの实景



「十三佛像」



御沢駈けの实景



「薬師如来像」



御沢駈けの实景



「日月燈明佛像」



御沢駈けの实景



「御蔵大黒弁財天像」



御沢駈けの实景



「御沢八萬八千佛像」



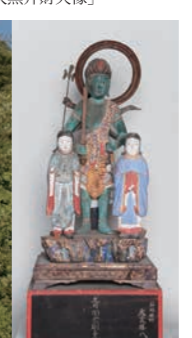
御沢駈けの实景



「飯ノ山白衣権現像」



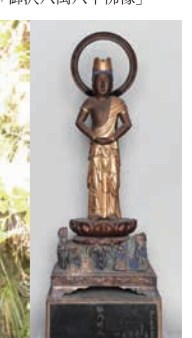
御沢駈けの实景



「青面金剛童子像」



御沢駈けの实景



「胎内明王像」



御沢駈けの实景 (湯殿山仙人沢・鶴岡市)



「七瀧大聖不動明王像」



御沢駈けの实景



「愛染明王像」